

# 『源氏物語』における「あくがる」の再検討

——男女間の例を中心に——

中 村 祐 美

はじめに

「あくがる」というと、「もの思ふ人の魂はげにあくがるるものになむありける」という六条御息所の生霊の台詞が連想される。そして、「あくがる」はその用例のために、従来はほとんど「心や魂が肉体を離れ出る」といった意味で使用されると考えられてきた。辞書や注釈書にも、何の疑いもなくそのように解説されている。しかし、それは「あくがる」の本義ではなかった。そもそも、「生霊」というものが特殊であり、藤本勝義氏は、

多くの「死霊」の記事がある中で、記録類から「生霊」を見出すことは、まずできない。生霊の具体的な描写、それ

は源氏物語の作者の創作なのである。

〔源氏物語の〈物の怪〉——文学と記録の狭間——〕（笠間書院・平成六年六月）

と述べておられる。実際に「心や魂が肉体を離れ出る」ような例は、「生霊」くらいのものではないか。そういった特殊な「生霊」の用例で「あくがる」を代表させていいのだろうか。そこで「あくがる」を調査し直し、特に『源氏物語』の用例を再検討することによって、作品の新たな解釈を試みてみた。

## 一、「あくがる」る男

『源氏物語』での「あくがる」の用例数は、全部で三十六例である。その用法を意味別に分類すると、「さまよう」・「離れ

る」といった移動を表すものが二十例、美しい景物などに心を「惹かれる」・「ほんやりする」といったものが五例である。

それとは別に、男女の恋愛関係で用いられている例が二十例と、もつとも多かった。さらに、その「あくがる」二十例が用いられている対象を見てみると、夕霧八例、光源氏四例、柏木二例、六条御息所（生霊）二例、左馬頭一例、鬚黒大将一例、薫一例、不特定一例である。これを見ると、六条の御息所と生霊の二例以外は、すべて男性に対して「あくがる」が用いられていることがわかる。どうやら生霊の用例は、むしろ特異なものということになりそうだ。従来はこれにあまりにも重視しすぎていたのではないだろうか。

そこで、男性に用いられる例で、まず男性が自分自身の状態を自ら「あくがる」と表現している例や、男性側の視点から描かれる「あくがる」の用例を挙げ、検討してみることにする。

①まことには変るべきこととも思ひたまへずながら、日ごろ経るまで消息も遣はさずあくがれまかりありくに、臨時の祭の調楽に夜更けていみじう襄降る夜、これかれまかりあかるる所にて思ひめぐらせば、なほ家路と思はん方はまたなかりけり。

〔帚木〕七四頁

①は、『源氏物語』における「あくがる」の初出であり、左馬頭が自分の体験談を語る場面である。ここでの「あくがる」は、複数の女性のもとに通い、ふらふらとしている様子を示す「まかりありく」とあるので、左馬頭の「心」が「身」からさまよい出ているわけではない。では、一体どこから「あくがれ」ているのか。「あくがる」はもともと、「本来の場所から離れてさまようこと」という意味であるから、その起点となるものがあるはずである。ここでは、「消息も遣はさ」なかったのは、この話の中心となる指喰いの女であり、「なほ家路と思はん方はまたなかりけり」とあることから、左馬頭が「あくがれ」たのは、その指喰いの女のもことからであると考えることができる。さらに、左馬頭が「あくがれ」たことが原因で、指喰いの女は「思ひ嘆き」、ついには亡くなってしまう。また、左馬頭は「ひとへにうち頼みたらむ方は、さばかりにてありぬべくなむ思ひたまへ出でらるる」と彼女のことを回想しており、今となっては彼女こそが自分の本妻としてふさわしい女性であったと思っている。

次に、野分巻の夕霧の例を検討してみたい。

②内裏の御物忌などにえ避らず籠りたまふべき日よりほかは、

いそがしき公事、節会などの暇なるべく事繁きにあはせても、まづこの院に参り、宮よりぞ出でたまひければ、まして今日、かかる空のけしきにより、風のさきにあくがれ歩きたまふもあはれに見ゆ。

〔野分〕二二六八頁

③空のけしきもすぎに、あやしくあくがれたる心地して、何ごとぞや、またわが心に思ひ加はれるよ、と思ひ出づれば、いと似げなきことなりけり、あなものの狂ほしと、とぞまかうざまに思ひつつ、東の御方にまづ参でたまへれば、怖ぢ困じておはしけるに、とかく聞こえ慰めて、人召して所どころ繕はすべきよしなど言いおきて、南の殿に参りたまへれば、まだ御格子も参らず。(二七〇頁)

④かかる人々を、心にまかせて明け暮れ見たてまつらばや、さもありぬべきほどながら、隔て隔てのけざやかなるこそつらけれ、など思ふに、まめ心もなまあくがる心地す。

(二八五頁)

これらは、紫上を主とする六条院の女君たちを垣間見た夕霧の心の動揺を「あくがる」と言っている例である。夕霧は作品を通して、もつとも「あくがる」が多く用いられる人物であり、野分巻では立て続けに三例も用いられている。では、夕霧はど

こから「あくがれ」ているのであろうか。

②は「あくがれ歩き」とあり、あちこち移動して歩き回っている様子を表している。新編全集の頭注に「紫の上を見た心まどいをも含む。」とあるように、不意に垣間見てしまった紫上への思慕の気持ちが含まれていると考えられる。同じく③の頭注には、「前にも「風のさきにあくがれ歩きたまふ」(二六八頁)とあった。夕霧は、魂が浮遊するような気持になって、雲居雁に対するのとは別に、にわか紫の上その人への恋慕が加わったことを自覚する。」とある。このあと夕霧は明石の姫君のもとへ見舞いに訪れるが、ここで夕霧は姫君から紙と硯を借り、雲居雁とおほしき女君に、

(二八三頁)

風さわぎむら雲まがふ夕べにもわするる間なく忘れぬ君という歌を贈っている。つまり、夕霧は一途に想い続けていた雲居雁以外の女性に「あくがれ」てしまったことへの動揺と罪悪感から、ここで彼女への手紙を書いたのだと推測される。したがって、まだ正式に結婚しているわけではないが、夕霧が「あくがる」起点となっているのは、雲居雁なのである。

さらに、③と④ではどちらも「心地」という語が共通してお

〔賢木〕一一九頁)

り、夕霧自身が自分の状態を「あくがる」というように感じている。そして「心地」という語の使用からわかるように、この「あくがる」も、「身」と「心」が分離しているわけではなく、あくまで比喩表現なのである。また、ここでは紫上に対する恋情をにわか抱いた夕霧による密通が予感されるが、それが実行されることはない。この夕霧の感情は、自分の心の内だけに留められ、ついにその想いが遂げられることはないのである。それは、「あくがるる心地」がするだけで、「あくがれ」ているわけではないからである。

## 二、パフォーマンスとしての「あくがる」

⑤中將の君に、「かく旅の空になむもの思ひにあくがれにけるを、思し知るにもあらしかし」など恨みたまひて、御前には、

「かけまくはかしこけれどもそのかみの秋思ほゆる木綿綿かな

昔を今にと思ひたまふるかひなく、とり返されむものやうに」と、馴れ馴れしげに、唐の浅緑の紙に、袖に木綿つげなど、神々しうしなして参らせたまふ。

これは、光源氏が朝顔の斎院づきの女房である中將の君に送った手紙の文章である。朝顔への断ち切れぬ想いを、「旅の空になむもの思ひにあくがれにける」と表し、彼女への恨み言を中將の君に訴えている。「袖に木綿つげ」とあるが、光源氏は以前、野宮で御息所との別れの場面でも袖を用い、歌の贈答をしている。そして御息所と斎宮が伊勢へ下向する群行の日に、木綿に文をつけて母娘に消息し、歌の贈答が行われている。またこの例は、

⑥この御生霊、故父大臣の御霊など言ふものありと聞きたまふにつけて、思しつづくれば、身ひとつのうき嘆きよりほかに人をあしかれなど思ふ心もなけれど、もの思ひにあくがるる魂はさもやあらむと思し知らるることもあり。

〔葵〕三五頁)

⑦かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂はげにあくがるるものになむありける」となつかしげに言ひて、なげきわび空に乱るるわが魂をむすびとどめよしたがひのつま

とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変りたまへり。

(四〇頁)

という、六条御息所もしくは生霊の用例と「もの思ひ」・「空」などの語句が共通している。ここでの「あくがる」は、⑥・⑦の葵巻の用例を踏まえたものであるとすることができ(2)。さらに、ここで登場する中将の君という女房にしても、同じ呼称の女房が御息所のところにも仕えていた。したがって、ここは全体を通して読者に六条御息所を想起させるものになっている。そして後の文章で源氏は、

あはれ、このころぞかし、野宮のあはれなりしことと思し  
出でて、あやしう、やうのものと、神恨めしう思さるる御  
くせの見苦しきぞかし。(一一〇頁)

と回想しており、御息所との感慨深い別れが一年前の同じ秋の季節であったことが知らされる。

この例が⑥・⑦を踏まえているとすると、この「あくがる」も「心」や「魂」が「身」からさまよい出ること、といった意味になる。つまり、これは朝顔を想うあまり、自分の身体から魂が「あくがれ」てしまっている、ということである。しかし、ここでの光源氏は、六条御息所のように生霊になって「魂」が遊離しているわけではない。したがって、これは自分の想いの

『源氏物語』における「あくがる」の再検討

強さを伝えるための比喩表現にすぎないのである。

そしてここでの光源氏は、意中の女君に直接語りかけるのではなく、お付きの女房である中将の君に対して自分の心情を訴えていた。次の例もそれに類似している。

⑧「かく尽させぬ御事はさるものにて、聞こえむ方なき御心のつらさを思ひ添ふるに、心魂もあくがれはてて、見る人ごとくに咎められはれば、今は、さらに、忍ぶべき方なし」と、いと多く恨みつづけたまふ。

(夕霧「四四九頁」)

⑧は、落葉宮のいとこである少将君に、夕霧が落葉宮への恨み言を言う場面である。落葉宮があまりに冷たいので、自分の心や魂が身からすつかり抜け出してしまった、という意味で使用されている。この例も、「魂」という語が見られるので、一見すると⑥・⑦の葵巻の例が思い起こされるが、実際に「心」や「魂」は遊離などしていない。こちらもただの強調表現である。相手の女性が頑なであるために、⑤と⑧で光源氏と夕霧はそれぞれのお付きの女房に対して「あくがる」を用いている。この場合の「あくがる」は、実り難い恋愛におけるテクニクとして使用されているのである。男性が自分自身の状態を

「あくがる」と口にする場合は、自身の状況が不利な時であり、わざと「あくがる」にマイナスのイメージを持たせ、下手に出て同情を買うように仕向けているわけである。したがって、⑥・⑦の、六条御息所・生霊の用例の模倣のような形ではあるが、そのような深刻さはまったくくない。むしろそれらの用例の重さを借りた、自己を演出するためのパフォーミング的な、新しい「あくがる」の用法なのである。

### 三、「あくがれ」らるる女

『源氏物語』では、女性から男性への批評というような形で用いられる、女性視点の「あくがる」が数例ある。それは、紫上から光源氏に対するものが一例と、雲居雁から夕霧に対するものが四例である。ここではその用例を比較・検討してみることにする。

⑨「似げなからぬ御あはひならむ」など言ひけるを、対の上は伝へ聞きたまひて、しばしは、さりととも、さやうならむこともあらば隔てては思したらじ、と思しけれど、うちつけに目とどめきこえたまふに、御気色なども例ならずあくがれたるも心憂く、まめまめしく思しなるらむこ

とを、つれなく戯れに言ひなしたまひけんよと、同じ筋にはものしたまへど、おほえことに、昔よりやむごとなく聞こえたまふを、御心など移りなばはしたなくもあべいかな。  
〔朝顔〕四七八頁

⑨は朝顔の姫君と源氏の噂を耳にした紫上が、「例ならず」「あくがれ」ている光源氏の様子を「心憂く」と思っており、人知れず苦悩する場面である。紫上は西の対にいるが、光源氏は「東の対に離れおはして、宣旨を迎へつつ語らひたまふ」とある。この「宣旨」とは齋院家の女房のことである。つまり光源氏は紫上に隠れて、自室で朝顔の姫君づきの女房を呼んで相談を持ちかけているのである。しかし紫上は「さりととも、さやうならむこともあらば隔てては思したらじ」と、人々の噂になつていふようなことが事実であれば、過去に明石の君との關係を打ち明けてくれたように、自分に隠しだてするようなことではないだろうと考える。また、「うちつけに目とどめきこえたまふに」とあるので、紫上は光源氏の様子を自分の目で見て、「あくがる」と判断している。つまり、二人は距離的に離れたところにいるわけではなく、顔色が窺えるほど近くににいるのである。そのように考えると、この「あくがる」は物理的な距離

ではなく、心理的な距離ということになる。「あくがる」の主語が「御気色」であるとすると、光源氏の様子がいつもどおりではない、つまり、いつものような紫上への愛情が感じられず、自分から気持ち「離れて」とあるということである。これは、後に「御心など移りなば」とあることから読み取ることができる。したがって、ここでの「あくがる」起点は、紫上ということになる。さらに、これ以降は紫上の心理描写が続き、「よろしきことこそうち怨じなど憎からずきこえたまへ、まめやかにつらしと思せば、色にも出だしたまはず。」からは、これが誰にも打ち明けられないほど深刻な悩みであることが窺える。

ところで、紫上から光源氏に対する用例はこの一例のみである。ここは女三の宮降嫁の場面とも類似しているが、それならばなぜ、女三の宮を六条院へ迎えた光源氏に対しては、「あくがる」が用いられないのであろうか。以下、若菜上巻の記述を検討する。

紫の上も、かかる御定めなど、かねてもほの聞きたまひけれど、さしもあらじ、前斎院をもねむごろに聞こえたまふやうなりしかど、わざとしも思し遂げずなりにしを、など思して、さることやあるとも問ひきこえたまはず、何心も

なくしておはするに、いとほしく、このことをいかに思さむ、わが心はつゆも変わるまじく、さることあらんにつけては、なかなかいとど深さこそまさらめ、見定めたまはざらむほど、いかに思ひ疑ひたまはむ、など、やすからず思さる。今の年ごろとなりては、ましてかたみに隔てきこえたまふことなく、あはれなる御仲なれば、しばし心に隔て残したることあらむもいぶせきを、その夜はうちやすみて明かしたまひつ。

〔若菜上〕一五〇頁

ここでの紫上は、朝顔巻と同じように女三の宮降嫁についての世間の噂を耳にするが、朝顔の姫君との一件を思い返し、「さしもあらじ」と、まだ事態をさほど深刻には捉えていない。その一方で、「さることやあるとも問ひきこえたまはず、何心もなくしておはする」紫上の、自分を信頼しきった様子に光源氏は心を痛める。さらに、「ましてかたみに隔てきこえたまふことなく、あはれなる御仲なれば、しばし心に隔て残したることあらむもいぶせきを」とあり、光源氏はこの時点で紫上に隠し事を行っていることを気にしている。ここが、前述した朝顔の姫君の場合と大きく異なる点である。朝顔巻でも、「さやうならむこともあらば隔てては思したらじ」と思っていた紫上であっ

たが、光源氏には彼女に嘘をつき、朝顔に懸想していた。

「斎院にはかなしこと聞こゆるや、もし思しひがむる方ある。それはいともて離れたることぞよ。おのづから見たまひてむ。昔よりこよなうけ遠き御心ばへなるを、さうざうしきをりをり、ただならで聞こえなやますに、かしこもつれづれにものしたまふところなれば、たまさかの答へなどしたまへど、まめまめしきさまにもあらぬを、かくなむあらるとしも愁へきこゆべきことにやは。うしろめたうはあらじとを思ひなほしたまへ」〔朝顔〕四八九頁

結局、想いを遂げることでできなかった光源氏は、後に紫上にこのように弁明することで彼女の機嫌をとり、この件を無理矢理終わらせようとしていた。

つまり、これらの場面は光源氏と紫上との間に「隔て」があるという点で一見類似しているようではあるが、若菜上巻では、光源氏はそのことに良心を痛めており、その翌日には女三の宮降嫁のことを紫上に打ち明けているという点で、大きく異なっている。そして、それを聞いた紫上は、

かく空より出で来にたるやうなることにて、のがれたまひがたきを、憎げにも聞こえなさじ、わが心に憚りたまひ、

諫むることに従ひたまふべき、おのがどちの心より起これる懸想にもあらず、堰かるべき方なきものから、をこがましく思ひむすばほるさま世人に漏りきこえし。

〔若菜上〕一五三頁

と、当人同士の色恋沙汰ではなく朱雀院の御意志でもあるため、仕方のないことであるとも考えている。逆に言えば朝顔の姫君の場合は、「おのがどちの心より起これる懸想」であったと紫上が判断しているために、「あくがる」が用いられたのであろう。そして、女三の宮の幼稚さを目の当たりにした光源氏の心は、紫上から「あくがる」ところか、「ゆゆし」と表現されるほどの執着を生み出すのである。

#### 四、夕霧と雲居雁

次に夕霧の例を検討してみたい。

⑩殿におはしても、心は空にあくがれたまへり。「さも見苦しう。あらざりし御癖かな」と、御達も憎みあへり。

上はまめやかに心憂く、あくがれたちぢる御心なめり、もとよりさる方にならひたまへる六条院の人々を、ともすればめでたき例にひき出でつつ、心よからずあいだちなき

ものに思ひたまへる、わりなしや、我も、昔よりしかならひなましかば、人目も馴れてなかなか過ぐしてまし、世の例にしつべき御心ばへと、親はらからよりはじめてたてまつり、めやすきあえものにしたまへるを、ありありては末に恥ぢがましきことやあらむ、など、いといたう嘆いたまへり。

〔夕霧〕四五三頁

⑪いとどしく心よからぬ御気色、あくがれまどひたまふほど、大殿の君は、日ごろ経るままに思し嘆くことしげし。典侍かかることを聞くに、我を世とともにゆるさぬものにしたまふなるに、かく侮りにきくことも出で来にけるをと思ひて、文などは時々奉れば、聞こえたり。

数ならば身に知られまし世のうさを人のためにも濡らす袖かな

なまけやけしとは見たまへど、ものあはれなるほどのつれづれに、かれもいとただにはおぼえじと思す方心ぞつきにける。

人の世のうきをあはれと見しかども身にかへんとは思はざりしを

とのみあるを、思しけるままとあはれに見る。

『源氏物語』における「あくがる」の再検討

(四八八頁)

⑫「なやましげにこそ見ゆれ。いまめかしき御ありさまのほどにあくがれたまうて、夜深き御月めでに、格子も上げられたれば、例の物の怪の入り来たるなめり」など、いと若くをかしき顔してかこちたまへば、うち笑ひて、「あやしの物の怪のしるべや。」

〔横笛〕三六〇頁

これらは、落葉の宮へ執心している夕霧に対する雲居雁側からの描写である。⑩は、⑨の紫上の用例にもっとも近い。「殿におはしても」とあるので、夕霧は雲居雁のいる自分の邸に帰っている。自分のもとにいるにもかかわらず、雲居雁は夕霧の状態を「あくがる」といつている。したがってここでの「あくがる」も、用例⑨と同様、物理的な距離ではなく、心理的な心の距離であることができる。また⑨の紫上や⑩の雲居雁の心情は、共に「心憂く」という語で表現されている。さらに、紫上は「御心など移りなばはしたなくもあべいかな」、雲居雁は「ありありては末に恥ぢがましきことやあらむ、など」といったう嘆いたまへり」と感じており、相手の心が他の女に移ってしまったら自分の立場が危うくなってしまふと思つている点でも共通している。

①の「大殿の君」とは雲居雁のことであり、ここでの彼女は、ついに落葉の宮と契りを交してしまった夫夕霧のことを嘆き、実家である二条邸に帰っている。「いとどしく心よからぬ御気色」なのは落葉の宮であり、そのため夕霧は「あくがる」状態になっていたのである。ここでの「あくがる」は、落葉の宮が気にかかるあまり、雲居雁のもとから離れ、一条の宮に通う夕霧を表している。

そのような状況を知って、藤典侍が雲居雁に手紙を送っている。ここでの二人の贈答は、『蜻蛉日記』における道綱母と時姫との贈答に類似していることが指摘されているが、若菜上巻でもこれと似通った場面があった。

他御方々よりも、「いかに思すらむ。もとより思ひ離れたる人々は、なかなか心やすきを」など、おもむけつつとぶらひきこえたまふもあるを、かく推しはかる人こそなかなか苦しけれ、世の中もいと常なきものを、などてかさのみは思ひ悩まむ、など思す。(『若菜上』六七頁)

これは女三の宮の降嫁直後、他の六条院の女君から紫上へ見舞いの言葉が寄せられる場面である。「かく推しはかる人こそなかなか苦しけれ」とあるように、その裏には今まで光源氏の

愛情を独占してきた紫上の不幸を少なからず喜ぶ気持ちが含まれている。藤典侍の手紙も同様であろう。

②は雲居雁の会話文であり、落葉の宮にうつつを抜かしている夫に、恨み言を言う場面である。ここでの「あくがる」は、①と同じように夕霧が落葉の宮邸を訪れていたことを表している。また、ここで雲居雁は、自分のことから「あくがれ」て落葉の宮を訪問し、帰宅が遅くなった夕霧に対し、面と向かつて文句を言っている。⑨の紫上は、源氏はもちろん、誰にも自分の気持ちを打ち明けることができないほど思い悩んでいた。そこに両者の違いが現れているのではないだろうか。

雲居雁には夕霧の歴とした正妻としての地位があるし、夫婦喧嘩をすれば逃げ込める実家まである。それに対して紫上には、後ろ盾がなく、光源氏を頼る他に術はない。そのため紫上は、光源氏の心が自分から離れてしまうことを恐れ、顔色を窺ったりしているのである。雲居雁視点での「あくがる」は、数回用いられるが、それよりも、紫上視点の一例の方が、より重みのある例であるといえる。

以上のように、紫上と雲居雁の視点からの「あくがる」の用例を見てきたが、朝顔巻の紫上の場合、結局のところ光源氏は

朝顔の姫君を妻にすることはなく、紫上に弁明し、彼女の機嫌をとることでこの件を締めくくっている。雲居雁の場合も、夕霧巻は最後に夕霧の多くの子どもを列挙することによって、最終的には丸く収まった形で終えられており、ある種喜劇的であるとさえいえる。また、⑨の光源氏と紫上、⑩の夕霧と雲居雁の用例は極めて似ており、これは、光源氏と紫上との間の問題を夕霧と雲居雁に代行・再現させているとも考えられる。紫上は人知れぬ悩みを一人で抱えながら、最後まで解決されることなく、光源氏の子を懐妊することもなく亡くなってしまふ。その一方で雲居雁は、浮気心を見せた夕霧に対して嫉妬をあらわにするが、そのために見捨てられることはなく、結果的には子だくさんで円満な家庭を築いているのである。

さらに、雲居雁と、女三の宮降嫁以降の紫上の描写にも多くの類似点が指摘されているが、女三の宮を六条院に迎えた光源氏に対して、「あくがる」が用いられることはない。それは、女三の宮と光源氏が正式な結婚をしているからである。相手の女性との間に正式な夫婦関係が成立していると、「あくがる」を用いることはできないのである。⑧の夕霧の用例で、「心魂もあくがれはてて、見る人ごとくに咎められはべれば」とあった

が、女性が男性を「あくがる」と判断し、咎めることができるのは、自分が正妻格である場合のみであり、相手の女性が正妻である場合には使用できない。したがって、紫上は光源氏を「あくがる」によって咎めることができないのである。

## 結 び

以上、「源氏物語」の男女間の恋愛関係における「あくがる」を調査してきた。その結果、一般的な男性には「あくがる」起点があり、その起点となっているのは、本来自分がいるべき正妻格の女性のものであることがわかった。また、左馬頭や夕霧の例のように、男性側から「あくがる」が用いられる場合は、女性との物理的な距離を指す場合が多い。それに対して、女性の視点から「あくがる」が用いられる場合は、必ずしもそのような物理的な距離を表しているわけではない。相手の男性と同じ場所にいる例も少なくなかったため、どちらかという心理的な「心」の距離を表していると考えられる。

男性が恋愛において「あくがる」といった場合には、その対象となる相手の女性の方に視線が行きがちであるが、「源氏物語」ではむしろ、その起点となる「あくがれ」られる側の女性

の悲しみに重点が置かれているのである。このような「あくがる」は、夫が妻から別の女性へ心を移すことであり、それを妻側の悲哀として描いていたのである。

加えて男性自身が自分の状態を「あくがる」と口にする場合は、自身の状況が不利なときであり、実り難い恋愛におけるテクニクとして使用されている。わざと「あくがる」にマイナスのイメージを持たせ、下手に出ることによって相手女性のお付きの女房の同情を買うように仕向けているのである。これらの用例は、一見すると六条御息所、生霊の用例を踏まえているようである。しかし、これらは模倣することによって、それが自己を演出するためのパフォーマンス的な、新しい「あくがる」の用法となっているのではないだろうか。それが『源氏物語』における「あくがる」の特殊性であった。

## 〔注〕

(1) 「あくがる」(二十五例) 以外に「あくがらしはつ」(一例)・「あくがらす」(二例)・「あくがれありく」(二例)・「あくがれがたし」(一例)・「あくがれたつ」(一例)・「あくがれはつ」(三例)・「あくがれまどふ」(二例)を含む。また「なまあくがる」(一例)を加えると全三十七例になる。

(2) ⑥の用例には推量の「なる」が、⑦の用例には「げに」が用いられており、一般的な「あくがる」の用法とは異なっている点に留意したい。

(3) 田坂憲二氏「夕霧卷の構造について——夕霧Ⅱ雲居雁の側面から——」『香椎湯』(福岡女子大学) 昭和五十八年三月